

§1- 「ニュースレター」に期待すること  
成城大学学芸員課程 岩佐光晴

§2- ミュージアムを外から考える 第3回  
大分大学教育学部 教授 田中修二

§3- 学芸員名鑑 第1回  
東京国立博物館 研究員 高橋真作

§4- 卒業生の主な就職先

§5- 編集後記

## 「ニュースレター」に期待すること

成城大学学芸員課程 岩佐光晴

私は本学に着任して9年になりますが、それ以前は、博物館に24年間、学芸員として勤務しておりました。博物館に在職していた頃に、私が本学に対して抱いていた印象は、優秀な学芸員を数多く輩出する大学というものでした。これは、美術館・博物館の業界においてはよく知られている事実です。しかし、本学に着任してみると、このことは学内的には必ずしも十分に認知されていないように感じました。

着任してすぐに、私は学内の学芸員課程委員会委員を委嘱されました。その年の6月に京都の同志社女子大学で全国大学博物館学講座協議会（全博協）の全国大会が開催され、私も初めて参加しました。そこで私は、本学出身で、各大学で学芸員課程を担当する4名の先生方と知り合い、本学出身者が美術館・博物館のみならず大学でも活躍されていることをあらためて認識しました。

その後開催された学芸員課程委員会では、私は、全国大会に参加した報告を行うとともに、本学は、美術館・博物館の学芸員、あるいは関連する専門分野で大学教員として活躍する本学出身者ともっと緊密に交流していく必要があるのではないかと提言しました。前号で、小島孝夫先生が触れられているように、それ以前には本学出身の学芸員との情報交換会が行われていたようですが、その頃には実施されなくなっていました。私の提案は大方の賛同を得て、早速関係者の名簿作りを始めましたが、情報収集に手間取っているうちに、いつしかその計画も頓挫して今日に至っています。

こうした中、本ニュースレターの話が持ち上がった時に、私は、大変時宜を得たものと思いました。前記したような本学出身者との交流は、会合という形をとらずとも、ニュースレターを通して十分に可能です。しかも、インターネットで配信されますので、いつでもどこでも読むことができます。現役の学生は、これ

〈写真〉作品撮影の様子



を通して様々な先輩方の情報を得ることができ、先輩の方々は本学の学芸員課程の実情を知ることができます。さらに本学出身の学芸員同士の交流の場が生まれることも期待されます。

学芸員という仕事は、専門性が高いために、大学院に進学してさらに勉強を続ける必要があります。学芸員に憧れても、それがネックと

て学芸員への道を断念する学生も少なくありません。本ニュースレターを通して、一人でも多くの学生が学芸員を目指し、優秀な学芸員を輩出してきた本学の伝統に連なることを願ってやみません。そのためには、本ニュースレターの刊行を継続していくことがまず大切になります。私も学芸員課程委員会委員の一人として、そのための努力を惜しまない覚悟です。

## 『地方の学芸員への期待 – 美術と教育の遠い現場から』

大分大学教育学部教授 田中修二 (1999年 文学研究科美学・美術史専攻博士課程後期修了)

大分大学の教育学部に勤め始めてから丸18年がたった。

以前は教育福祉科学部という名称で、教員免許を卒業要件としない課程（ゼロ免）が設置され、そのうちの情報社会文化課程総合表現コースで学芸員資格に関する科目を担当していた。しかし博物館法改正にともない2012年度から資格に必要な科目が大幅に増えたことに対応できず、さらにゼロ免自体も小学校教員養成の重点化を目指す2016年度の学部改組により廃止された。そのため私自身の担当授業科目数は大幅に減って、はたから見ればまちがいなくうらやましがられる状況になっている。とはいえ、そこにのこったのはうれしさよりも、なんともいえない喪失感や絶望感だ。

毎年平均して約10名程度の資格取得を目指した受講生は、多くが美術などの実技を学ぶ学生であったから、学芸員になった者はほとんどいない。けれど少なくとも多くの授業や実習を通して美術館に親しみ、その役割を理解する機会が生まれたことは大きな成果であったと思う。博物館実習は大分市美術館と大分県立芸術会館（現・大分県立美術館）にご協力いただき、美術館の展覧会等の企画に深く関わる機会もあり、大学と美術館双方、さらには地域の美術にとって、資格の取得を目指した学生の存在が（彼らの卒業後の活動も含めて）大きな力となった（これからもなりうる）のもまちがいな

### 【略歴】

1968年生まれ。初等学校から大学院まで成城学園で学ぶ  
1991年 文芸学部芸術学科卒業  
1993年 文学研究科博士課程前期修了  
1999年 文学研究科博士課程後期修了  
2001年 大分大学に勤める  
専門は近代日本美術史、とくに彫刻と京都の日本画

翻って現在の状況を見てみると、うちの教育学部で中学の美術の教員免許を取ろうとする学生はほとんどいない（実技入試は改組により廃止された）。それほどに美術への関心が薄いのだろうか。それとも小学校の図画工作に関する授業も一部担当している私のつまらない講義が、さらに学生を美術から遠ざけさせているのだろうかと思ってしまう。今日この頃だ。

自分のことを棚に上げていえば、美術に対する興味、関心を育むという点において、やはり現在の小・中・高での美術教育は十分な成果を上げられていないのだと思う。時間数はますます削られ、専門の教員の数も減らされていく。昨年10月には学校での芸術教育の担当が文部科学省から文化庁に移管されたが、このことも体のよい厄介払いのように見えてしまう。こうした状況が10年後、20年後にどのような結果をもたらすのか、私には全く先が見えていないのが正直なところだ。

そのなかで、地方の（地域の）美術館の存在はますます大切なものになってくる。その潜在的な（とまだいってよいと思う）教育的機能、それがもっている全国的なネットワーク（組織として、またそれぞれの学芸員さんの個人的なものを含めて）、また企画展などを通して全国へと発信していく力は、地方の大学教員の立場からすればとてもうらやましいものである。実のところ、（きっと多くの学芸員さんからは異論も出るだろうが）美術館や博物館にこそ、現在の中央集権的な文化のあり方、文化における「中央」と「地方」の格差を乗り越えて、新たな世界を生み出す可能性が秘められていると、私自身は考えている（おそらくは近年盛んな地域におけるアート・プロジェクト以上に）。

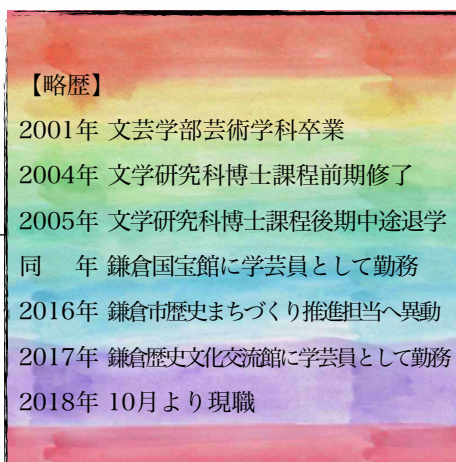
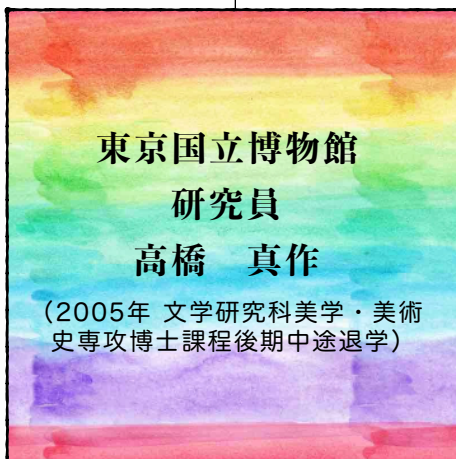
## 『学芸員生活』

私の専門は美術史とくに日本中世絵画史で、現在職場では主に室町時代の水墨画を担当しています。とはいえ、東博に着任してまだ半年足らずしか経っていませんので、ここでは、これまで経験してきたことや感じたことをざっくばらんに述べることで、今後の皆さんの何かしらの参考になればと思います。

学部時代の私はろくに授業にも出ないボンクラ学生で、インドや東南アジアへのバックパック旅行に熱中していました。それがどうしたことか、卒論執筆をきっかけに中世美術の面白さ・奥深さに目覚めてしまい、一念発起して大学院へと進学。じつは学芸員資格も院生になってから取得しています。これから学芸員を目指す方にとっては、ちょっと安心材料になるかもしれませんね。

ただ、院に進学してからは、基礎ができていない分、それこそ死に物狂いで勉強しました。美術史の基本であるところの「実物（モノ）をきちんと見る」という経験も乏しかったので、月に一度は夜行バスで京都国立博物館に行き、平常展示を朝から夜まで観て、その日の夜行バスでまた帰るといった生活を続けたりもしました。

先生方の懇切なご指導のおかげをもって、無事に修士論文を提出し、その成果を翌年度の美術史学会全国大会で発表。直後に「鎌倉国宝館」の公募があり、運よく合格となりました。応募に際して、学会発表という業績を提示できたことは大きかったと思います。人生何事もタイミングは重要ですが、その時々で武器となる材料を予め備えておくことこそ、運を引き寄せることだと学びました。



奉職した鎌倉国宝館は、鎌倉市の直営館で、創立は1928年。国内でも屈指の老舗館です。鎌倉市域の寺社から寄託を受けた数多くの文化財を収蔵しており、まさに中世美術の宝庫のような博物館です

が、正職員はわずかに4人ばかり。当然のことながら、業務内容はきわめて雑多です。展示品の選定や陳列、図録執筆といった当たり前の学芸業務だけでなく、消耗品費の起案から美術品輸送の入札事務、印刷物のデザイン作成等々、とにかく書ききれないくらいの業務をこなしてきました。特別展も毎年のように担当し、自転車操業のように追われていたが、その分とても充実した毎日でした。

同館に11年間所属したのち、鎌倉市役所の「歴史まちづくり推進担当」に人事異動となりました。仕事内容は、オープン予定の新博物館の開設準備でした。最初は戸惑いもありましたが、長い学芸員人生のなかでもなかなか経験できない貴重な機会と捉え、職務に邁進しました。庁内での調整や情報共有など、組織人としての立ち居振る舞いを学べたことも、現在の職務に活かされています。

その後、何とか無事に「鎌倉歴史文化交流館」がオープンし、1年半ほどそこで学芸業務と管理業務全般を担いました。ちょうど運営が軌道

に乗ってきたタイミングで東博の募集がかかり、2018年10月に移籍し、現在に至ります。

鎌倉では13年半ほど学芸員として勤めましたが、とくにお寺さんや神社さんをはじめ、文化財を取り巻く多くの方々と親しく接する機会を得たことは、

☞ 何にも代えがたい大きな財産です。今後もこのご縁を大切にしていきたいと強く願っています。

自身のキャリア形成という点では、日々の業務に忙殺されながらも、少しずつでも論文を書いてきたことの意味は大きいと感じます。職務時間中に執筆できたことはほとんどありませんが、空き時間や休日などを使い、時には睡眠時間を削ってでも、何とかかたちにしてきました。現在の状況を導いてくれたのも、論文という武器を備えていたからこそと思っています。

このように書くと、まるで学芸員には休日など無いように聞こえるかもしれませんが、事実その通りです。「学芸員になる」ということは、「学芸員業務」だけをいうのではなく、むしろ「学芸員生活」と同義といえるでしょう。休日は、図書館で調べものをした

り、各地の展覧会を訪問したり、学会や研究会に参加した

り、ということに多くが費やされます。ただ、それをツライと思ったことは一度もありません。むしろ、モノの核心に近づく新たな発見が得られることは、無上の喜びといってもいいでしょう。

そういった意味では、世の中で、学芸員ほど幸せな職業はないと言ってもいいかもしれません。趣味と実益を兼ねた学芸員という生活すべてに、そうした知的な喜びがあふれているのですから。少なくとも私は、そう感じています。

というわけで、雑駁な話に終始してしまいましたが、今後また機会があれば、国立博物館の業務や公立館との違いなどについて、詳しくお話できればと思い

◆ 卒業生の主な就職先 「主に美術・民俗・考古の分野でOB・OGが活躍しています！！」

(博物館・美術館等文化財関係施設)

北海道立帯広美術館 北海道立近代美術館 北海道立函館美術館 青森県立郷土館 棟方志功記念館 八戸市美術館 宮城県美術館 木の博物館 吉成銘木店 郡山市立美術館 みちのく民俗文化研究所 茨城県近代美術館 小杉放菴記念日光美術館 栃木県立博物館 群馬県立自然史博物館 群馬県立館林美術館 群馬県立歴史博物館 高崎市美術館 朝霞市博物館 うらわ美術館 川口市教育委員会 川越市立博物館 埼玉県立近代美術館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 宮代町郷土資料館 我孫子市教育委員会 国立歴史民俗博物館 千葉県教育委員会 千葉県立中央博物館 千葉県立美術館 千葉県立房総のむら 船橋市教育委員会 八千代市立郷土博物館 出光美術館 太田記念美術館 大倉集古館 小川美術館 国文学研究資料館 国立西洋美術館 汐留ミュージアム 渋谷区立松濤美術館 静嘉堂文庫美術館 世田谷区立次大夫堀公園民家園 世田谷区立郷土資料館 泉屋博古館分館 タイムドーム明石(中央区立郷土天文館) 大東急記念文庫 たばこと塩の博物館 東京国立近代美術館 東京国立博物館 東京ステーションギャラリー 東京都江戸東京博物館 東京都写真美術館 東京都庭園美術館 東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 中富記念くすり博物館 日本書道美術館 ニューオータニ美術館 根津美術館 練馬区立美術館 八王子市郷土資料館 府中市立美術館 ブリヂストン美術館 文化庁 松岡美術館 三井記念美術館 目黒区美術館 山種美術館 厚木市郷土資料館 神奈川県立歴史博物館 鎌倉国宝館 鎌倉市鏑木清方記念美術館 川崎市市民ミュージアム 川崎市立日本民家園 そごう美術館 松前記念館 玉川文化財研究所 横浜美術館 清春白樺美術館 山梨県立博物館 池田満寿夫美術館 諏訪市美術館 長野県信濃美術館 長野市立博物館 岐阜県現代陶芸美術館 岐阜県美術館 上原美術館 MOA美術館 静岡県立美術館 愛知県美術館 豊田市美術館 佐川美術館 アサヒビール大山崎山荘美術館 泉屋博古館 京都国立近代美術館 大阪市立東洋陶磁美術館 大阪市立美術館 能楽資料館 倉敷市教育委員会 荻野美術館 海の見える杜美術館 広島市現代美術館 ふくやま美術館 愛媛県美術館 高島華宵大正口マン館 香川県立ミュージアム 出光美術館門司 熊本市現代美術館 熊本市立熊本博物館 大分県立歴史博物館 沖縄県教育委員会 那覇市歴史博物館

《編集後記》

▲本号では田中氏に大学という現場から美術教育の大切さとそれを取り巻く現場の一端を語っていただいた。高橋氏には学芸員のキャリア形成といった視点からご自身の経験をもとに生きた声をいただいた。

▲巻頭写真について 展覧会に出陳される作品は図録掲載のため新たに写真撮影されることが多い。写真はもちろんフォトグラファーが撮影するが、現場では担当学芸員が立ち会いをするのが通常である。作品の安全を考慮しながら撮影場所に設置し、撮影画像の確認などを行う。そんな一場面だ。多くの仕事があるように、作品撮影を担うフォトグラファーがいがいにもミュージアムという場は多種多様な業種の人たちの関わりによって成り立っている。学芸員はもちろん、加えて広報、総務事務、経理といったミュージアム運営を直接担う人たち。外部との関わりとしては、パソコンやサーバーなどのシステム管理業、美術品輸送業、展示設営業、印刷・出版業、空調や照明といった設備関連業、資料・作

品保存に精通した仕事といったように、どれも、ミュージアムにとって欠くことのできない仕事である。学生諸氏には将来の仕事を選ぶ際、学芸員になることだけでなく、そこには様々な選択肢があることを、ニュースレターを通して知ってもらえればと思う。

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 02  
Seijo University Curator Course NewsLetter  
発行：成城大学学芸員課程委員会  
157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20  
TEL 03-3482-9045  
mail: gakupei@seijo.ac.jp  
編集担当 吉井大門 篠原聰  
2019年3月31日 発行